1-9-K6-5　認知症者等を対象とした病院内での「洗濯ばさみセンサ」使用による危険防止策の実態調査結果

[1]リハビリテーション科学総合研究所，[2]関西リハビリテーション病院，[3]兵庫医科大学リハビリテーション医学教室
○西下　智[1,2]，久米　早苗[2]，松本　憲二[2]，坂本知三郎[2]，道免　和久[3]，吉田　直樹[1,2]

【緒言】当院 (回復期リハビリ病院) にはリハビリ工学の部門があり，院内で用いる各種製品の開発･製作，運用支援等も行っている．中でも最も多く利用されているのが「洗濯ばさみセンサ」(CS) である．これは一般の洗濯ばさみの先端に電極をつけ端子つきのコードを接続しただけの製品だが，洗濯ばさみに挟んだ絶縁物を引き抜くと端子が電気的に ON になるので，警報システム等に接続すればセンサとして機能する．以下では CS を用いた当院での認知症者等対象の危険防止策の実態を使用調査結果を踏まえて報告する．
【方法】これまで数年おきに院内全病室 (144 床) での CS を含む各種製品の使用実態調査を行ってきた．ここでは 2017 年 6 月の調査結果をもとに CS の使用数や使用方法を示す．
【結果】病室内での CS の使用は 28 床で計 39 個．ヒモなど先に絶縁板をつけて CS にはさみ，ヒモが引かれると警報を出すのが基本的使用法である．取り付け対象は a) 患者衣類 24，b) ベッド柵 13，c) カーテン 1，d) 車椅子 1 であった．a)，b) には様々な使用方法があり，発表時は誤用例も含めて写真で報告する．病棟では計 20 個の在庫があり，故障時の交換の他に病室外での動作感知等に使用される．a) では患者が装置を外してしまう問題が挙がっている．
【考察】長年にわたり CS は様々な場面で有効に使用されてきた．CS は非常に安価で，簡単な工作で製作可能 (当部門の Web でも作り方を紹介) なので，他施設でも活用できると考えられる．一方で誤用や，他のセンサの使用がより適切と思われる使い方もみられ，適材適所の使い分けが重要である．